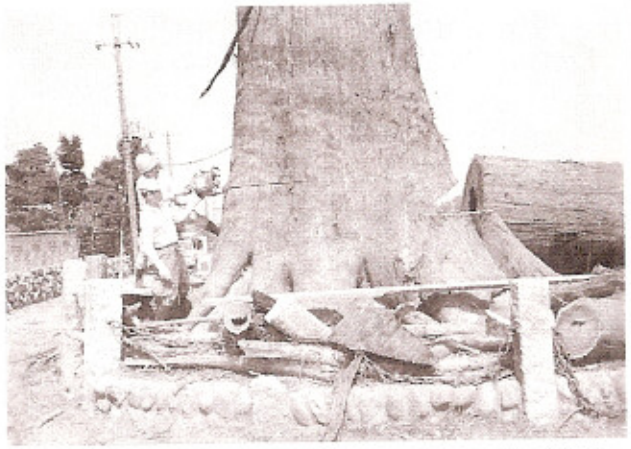
昭和六十三年再編

元八王子村郷土誌

目次

一、序　言……安田富一……1
一、巻頭言……眞岡明雄……3
一、元八王子郷土史の再刊を祝して……高橋　昇……4
一、八王子城城下町の変転……6
一、神社の部……12
一、寺院の部……17
一、元八王子村名所旧蹟伝記……22
一、氏照の系図……38



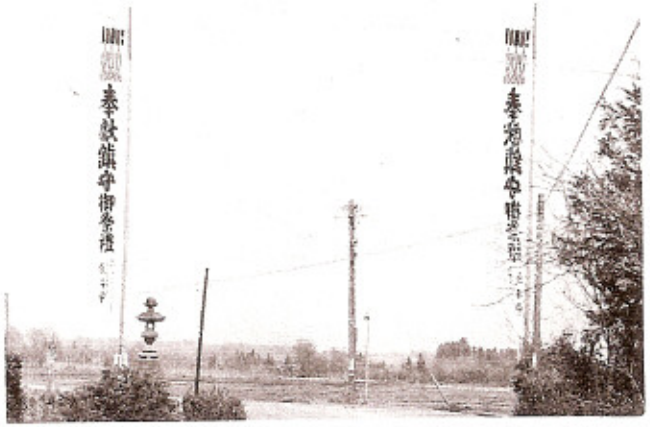
昭和４７年４月２９日斧入梶原杉

昭和４７年４月２９日記念木の倒れる瞬間

記念木の巨大を示す

輪切の梶原杉、八王子市の資料館へ寄贈

昭和４７年４月１日の梶原杉の遺景



昭和３５年４月の出口灯籠と初めて建った旗。
当時は（俗に出口田甫）一戸の家もなかった。

千丈敷跡西方の石畳の一部

箱根彫刻の森にて編者・安田

八王子城本丸址（八王子城跡）

八王子城趾麓・登山入口

序　言

私が此の郷土誌を再発行するにあたり一言附記しておきたい。

昭和二十七年のことだから三十七有余年の歳月を経ている。小学校は不幸にも戦災で焼失して学校の貴重な保存書類は惜しくも烏有にしてしまった。それは冠頭の眞岡校長の記にも載せてあるように、思はぬ所からその一部が残っていたのである。

当時の校長初め多くの教員達が調査、研究して編制し成したであらう尊い郷土誌である。この色あせた貧本の郷土誌がどうして私の手許に入り残ったかは、さだかでないが永く保存して来たのである。内容の一つ一つは短い文面であるが簡素で愛好者や学生、児童達にも分り易く載いてある。鉄筆で書き、謄写刷りの極細字である。永い年月と粗雑な紙で（属にワラ半紙）一部の文字も判読し難い個処も多くあった。左手に拡大鏡で時には一字一句判読しながら写字した。

その不明部分は補筆しないで〇印とし出来るだけ忠実に本誌の面影を残したいからである。その点お許しを戴きたい。

此の尊い郷土誌を。!!　教員達の汗の浸んだ郷土誌を。!!　此のまゝ埋れて了っては惜しい気がする。

郷土誌については諸々の氏が書いてはあるが何れが真実の歴史に近いかは誰もが分らない。それは、それでいゝのである。読れる者が自分で想像し判（はんだん）しその史蹟を味ひ知ればいゝ。歴史の深さが浸じみ出て来るであろう。

激しい変革な今日の上に立って見つめる時、郷土は懐しくまた尊いものである。

『故郷は遠きにありて想ふもの』とあるが誰もが愛着に変りはない。最近学生児童やその婦人部が郷土誌に関心を持つようになった。

この細やかな『元八王子村郷土誌』を読み史跡を探らうとする多くの人に心の糧となり伴侶となって愛され手引となれば幸甚である。

末尾ですが本誌発行に際して元八王子小学校長高橋昇氏より大変ご協賛とご理解を載きました。

昭和六十三年春　　編者　安田富一

（尚本小冊誌発行について私の記事を五、六葉加筆押入した。）

巻頭言

この本を印刷するについて一言述べさせていただく。

歴代の先輩校長さんや其の他の諸先生が、どんなに苦心して其の学校の郷土誌編纂に当って来たかわ、四十年近い教員生活を送って来た私にわよく分る。此の学校では大先輩平井校長によって計画され、編纂された此の研究物が長い間用いられて来たことは容易にうなづかれる。勿論其の後の校長さんや、諸先生がより以上の研究や編纂をなさった事とわ思うけれども、多分此の研究物が根元として取り上げられて来たと信ずる。

然るに不幸昭和二十年八月の戦災で、全部の研究物も記録も殆んど焼失した。此の研究物も当然失はれた事と思い、よりよい郷土誌編纂の話が持ち出されて居たのである。

ところが別掲のような、思いがけない事情から之が世に出て来たのは先輩諸兄の熱い誠実が、天の恵を受けたものと深く信じて疑はぬものである。

先づうやうやしく一本をとって大先輩平井校長の霊に供へる。更に一本を此の本が世に出るもとになった一女性の純真なる教育愛に捧げる。

昭和二十七年の新春

（元）東京都南多摩郡元八王子小学校長

眞岡明雄

八王子城跡近郷図

『元八王子郷土史の再刊を祝して』

学校は、連綿として続く地域社会の長い歴史の中から近代に至って成立した時代の落し子です。従って本校のような古い学校でも歴史は浅く百年前後にすぎません。しかし、明治・大正・昭和にわたって激動の時代を、地域の人々にあたたかく見守られながら、その使命を果してきました。

このことは、国の教育制度のためばかりではなく、古く万葉の時代からこの地で生活を営んできた先人達のたまものでもあります。

すなわち、次代の者に託す彼らの熱き願いが蓄積され結晶となって、幾世代にもわたり多くの人々に引きつがれてきたからにちがいありません。そのためにも、いまの私たち教師や親は地域のこうした先人の心をくみとり、地域の歴史である郷土史を二十一世紀に生きる子どもたちに、真剣にしかも情熱をこめて教え伝える必要を痛感します。

また、現代学校教育の重要課題である、国際社社会で活躍できる日本人の育成について、その達成のためにも自分の地域・社会・国を愛し、優れた文化を身につけた児童の育成が急務です。

―自分の地域や国を大切にできなくて、なんで他国をその国の人々を尊重し、貢献することができるでしょうか。―こうした社会の要請にこたえる意味からも、自分の住んでいる地域を知ることはまた大切です。

今後は児童の歴史教育に、あるいは父母の郷土への関心を深める意味でも、この書を充分活用させていただきます。

最後になりましたが、この適切な時期に郷土史再刊を手がけられた安田富一氏の、地域を愛する心情と再刊に寄せる熱意と労苦に対して心より敬意を表し感謝申し上げます。

昭和六十三年三月一日

（現）元八王子小学校長　高橋　昇

◇ 八王子城城下町の変転

八王子城は永禄五年（又は元亀三年とも云う）北條氏照により滝山城の城名、滝山の滝は落つるという縁語あれば忌はしとて、本村元八王子に移されたるものにして、城の造り及び城下町は滝山城のものをそのまゝに移せしものなりという故先づ滝山城の城下町について述べることゝする。

滝山城（加住村にあり）は管領、上杉分国の頃大永元年大石源三定重により今の加住村の崖岸にて多摩川に臨める多摩丘陵上に築かれたものである。其の後、其の子源左ヱ門定久に之を伝えた。関東では有名な山城で今尚本丸、二の丸、井戸或は空濠が存してゐる。

当時城下町として横山、八日市、八幡の三宿が出来てそこに毎月四八の日に市が開かれて諸品の取引が行れた。八の日に立つ故八日市と呼び、四の日に立つ所は四日場と呼び、四日場の地名は横山の宿の小字として含まれてゐる。而して四日、八日、十四日、十八日、廿四日、廿八日、と交互に月六回市が開かれた。之が次第に変転して現在の八王子の市となったのである。

然るに次の代の養子（実は北条氏康の二男）氏照は城名の滝山の滝には落つるという縁語あれば、忌はしとて永禄五年（又は元亀三年ともいう）遂に今の本村元八王子の城山に移城した。

それは当時甲州より屢々侵略されしかば甲州口押えのためであろうと、新編武蔵風土記稿に書いてある。この時八王子權現を祀りて城の鎮守としたので八王子城と号した。之が現在の八王子の市名の起源である。城下町としての横山、八日市、八幡の三宿も市場も共に移転した。然れども前々図の如く戸数は数十戸に過ぎないが、宿名の横山、八日市、滝山の名は加住村に今尚残ってゐる。

さて元八王子の城下町は慈根寺（古くは神宮寺）と称したのは八王子城の城下町となったので、八王子と改名したが今の大宇慈根寺を中心として城山川の侵蝕谷を占めてゐた。

今元八王子村の当時の三宿の跡を尋ねて見るに八王子市日吉町より西え水無瀬橋を渡りて下横川、八割より中横川を過ぎて上横川の田の辺を廻りて西に行くと、学校前よりの道と合する点ありて此処に大きな石灯篭がある。之より遥か西、八王子城址山麓に至る約八粁（一里半）の道に沿いたる所が、天正年間当時の城下町にて今の大字元八王子と称せらるゝ所である。この石灯篭のある入口より西え七百米（約六町半）曲り道にて小さな地蔵堂ある坂道の所即ち当時の横山口に至る所までを、八幡宿と云いて城下町の最も東部を占めた所である。

横山宿の次は八幡宿との境である、坂道より遥か西南え桑原を過ぎて宮崎氏の家かどの曲り道までゝこの桑原を横山原と称してゐる。当時横山宿の東端をなせる所に横山宿の入口ありたりと云ふ。

八日市宿の次は八幡社の前の宿にて『宮の前』とも『八日市』とも云う。今の字慈根寺である。八日市の西を中宿という。このようにして当時の城下町は戸数千五百内外にて人口七千（但し二千内外の城兵を含む）に及んでゐたという。

天正十八年八王子城、落城の後、寄手の将前田利家は家臣長田作左ヱ門に命じて浅川の砂　の下段丘の草の茂った広場に、離散した城下町の商人達を集めて新八王子の建設にかゝったのである。かくて新に建設された八王子と区別するため従来のものを元八王子村と呼ぶに至った。

◇八王子城

一、所在地

浅川駅の西北約一里元八王子村大字元八王子と恩方村大字下恩方との、境にあって城山と呼んでゐる。四面山を繞らし東方稍豁けて城山川の走るあり、且つ西に小仏の険を施した要害の山城である。

北條氏照が永禄五年滝山城より移り来って、築いたものであるが氏照は其の後も当城及び滝山城を往復し機に応じて其の何れにも據ったと見做される。後甲州え備えんがため全く此処に移って、元亀三年には築城の実悉く成ったと云う。氏照が滝山城より八王子城に移ったのは永禄五年であるという説と、元亀三年であるという説とあるが何れにも各據るべき文献を有してゐるので、両説を生かすのが穏当と認めらる。尚氏照は山麓の宗関神護寺に因んで、八王子権現を城中に勧請し八王子城と号した。城廓広大なりしを以って天正十八年に至っても修営全く終るに至らなかったという。

二、戦　況

天正十八年豊臣秀吉が小田原城を攻むるに際し、氏照は氏政を援けんとし家臣中山勘解由、横地監物等に城を委ねて去った。然るに豊臣方の将、前田利家、上杉景勝等は甲斐の○吹嶺を越えて松枝の城主大道寺駿河守政繁を攻めて、降参せしめ彼を案内者として武蔵に攻め入り鉢形の城主北条安房守氏邦を降し、其の近辺の小城数ヶ城を併せ上州、武州の降人を先鋒として、一万五千の軍兵を率い八王子城に向った。

時は天正十八年六月廿三日、本丸には氏照の長臣横地監物立籠り、中の丸には中山勘解由立て籠

る。一庵廓に狩野一庵籠り金子廓には金子三郎左ヱ門、山下廓には近藤出羽介あり。卯刻に至って利家の先鋒横地左近大手口に至る。

搦手口えは上杉家の先鋒として大道寺駿河守繁押し向ったが、景勝魁首長藤田能登守の許に平井重造といふ八王子素生の者あり、藤田は彼を嚮導として東の方渓間より進んで狩野一庵が籠る三の丸を攻撃す。城兵山本太郎左ヱ門等頻りに防戦す。かゝる間に日○備前守清長は風上より一庵廓に火をかけて、攻め入りしかば一庵並びに近藤出羽介助実、金子三郎左ヱ門家主等堪えられず遂に力尽きて自害す。安田上總介も表口より攻め入りしかば横地監物吉信は手兵二百を引具して、死物狂いに防ぎ戦う。

かくして奮戦数度に及びしが監物は到底敵すべからざるをみて、遂に城を脱走し桧原方面に再興を志せしも痛手に堪えかね途にて自殺せり。横地監物の落たるを見て、中山狩野は数回突出して猛勇を振いしも討死するもの次第に多く、今は僅かに十六騎を余すのみとなった。

搦手口の上杉攻口は藤田能登守信吉二の丸に攻め入り、塀際にて神保五郎右ヱ門の座首を得る。夏目舎人定吉、旗本五十騎に我が組の士を携え本城の外際につく。城兵今を限りの死戦寄手は流石上杉の軍進入、追出二度手痛く迫る。城兵亦たおる。残兵木戸を閉づ。夏目舎人城内に突入して本丸は景時の旗を立つ。かくて八王子の守兵城を枕に悉く討死せり。時に其の日の午后四時であった。

◇北條氏照

北條氏康、氏政は常に謡曲を好み陸奥守氏照は横笛の名手であった。在城閑暇の時自ら横笛を吹き臣下に乱舞させ興を催すこと度々であったという。

『大黒』と称する名笛を秘蔵してたが、此の横笛は天下の名笛として珍重せられ他に並びなきものである。然るに八王子城攻撃前に氏照は小田原え籠城故に、家臣笛の彦兵ヱというものに預けおきしに既に当地え寄手押し寄せ搦手口より上杉勢火をかけたれば、悉く討死し惜しいかな此の名笛も亦火の厄に遭った。

◇追手口

大手口とも此処にては大城戸とも号する由。その跡はしかと知らず。軍勢攻め寄する時横山口を破って城際に至るとあれば城下町あたりを通る八幡社の鳥居前を御霊谷戸、古の大城戸である。それより西北えさけ又山際通りに大手辺りと覚しき平地あれども、その先は山崩れて道絶ゆ。奥は山林となりてその跡知れず。

◇搦手口

城北にして滝の沢口という下恩方の方である。

上杉中納言景勝の軍勢此処より攻め入ったという。滝の沢といふ名を忌みて霜降り谷と唱う。滝山の城を此の地に移したるわけは、滝は落つるという義もあればとて此の地に築城せられしに搦手口に又滝の沢という名あれば霜降り谷と唱え替えたれども落城の際は矢張り滝の沢より落ちたりといふ。

◇山下廓

近藤出羽介助実の出丸である。

◇金子廓

金子三郎右ヱ門家重の廓で二の丸である。

◇庵曲輪

狩野一庵の籠りし廓である三の丸で搦手の方。

◇勘解由ヶ丸

中山勘解由家範の籠りし廓で中の丸ともいう。

◇千畳敷

一丁登りて山に附き五十間四方の地である。

◇本丸跡

三十三間四方の地この辺に築地などあり。

◇曳橋跡

本丸の西に石垣ありて幅九尺長さ三間許り高さ六、七尺でその下は谷川である。その向うは山崩れて道絶ゆ。

◇御守殿淵

落城の時本丸大奥の婦人らの川に入水せし所、今は谷川の流れあるのみにて渕なし。

◇升形

本丸路より続きて山え登ることを得。

◇馬場跡

十畳敷より西の方。

◇遠見台

城山の最も高い地にて大嵐山とも称す。小仏嶺に相接し相模、江之島並びに房総の山海を望む。

◇櫓　跡

千畳敷といふ所である。百間巨り山の屋根なり。

◇横地堤

横地監物○行にて谷川を堤沼地とせし土手である。長さ百間ばかり。

◇糧敷倉

是は八王子權現社の後山の辺りにて、すべて山際に米、麦などの焼けて炭になりたるもの今尚出づ。

神社の部

◇八幡神社（元郷社）祭礼日四月十六日（現今四月第三日曜日）

八幡神社は康平六年八月源頼義相州鎌倉由比郷鶴ヶ岡に清水の神を奉祀す。後治承四年十月源頼朝大庭景義に令して之を小林郷、松ヶ岡に遷す。（今此処を鶴ヶ岡と称す）建久二年四月営殿の造営全く成り正遷座の際、古神体を梶原景時に賜う。

景時即ち同年六月之を当地に奉祀す。其の当時棟礼今尚存す。降って覚正竜集発未十月新に社殿を造営し爾来星霜を経、社殿捐破せしを以て文明十七年乙巳十月改造す。元亀三年北條氏照八王子城を築き居住すること数歳此の間社領を賜る。降て天正十九年十一月将軍徳川家康公より社領（朱印）十石を賜り明治六酉年十二月郷社に列せらる。

一、梶原杉＝境内に老杉一株あり、梶原杉と称す。伝え言う、往古梶原平三景時当地に造営奉祀の際杉樹一枝を手折り杖となし携帯せしを此の地に押置きけるが、何時しか根を生じ次第に成長せるものなりと。現に森々たる老樹にしてその幹の周囲二丈三尺頗る壮観なり。

二、宝物＝棟礼三枚獅子（雄獅子、雌獅子）

三、敬神上に表札たる特殊事。高麗狗、御手洗鉢灯籠

四、祭神＝応神天皇

五、末社＝八雲神社、幹枝神社、荒神社、稲荷神社、天満神社

◇八王子神社

八王子神は延喜十六年帯春妙行和尚創めて勧請す。其の後元亀三年陸奥守北條氏照該地に城廓を築きし際、八王子神社は特に武将の尊神なるを以って社殿を改造し此の神を鎮守とし由って城名を八王子となす。

天正十八年六月二十三日兵変に罹り一旦鳥有に帰せしを慶長年間、里民社殿を再興し本村の鎮守となす。

元禄年、中伊勢国今泉の産にして児玉氏の○出家して此の山中に居住し、鉄山無心と号する者神

社並に神像まで建立することになりしと。今尚神像存在す。此の鉄山無心常に木食を行いければ毎日猿一匹来り、山中より薯蕷を堀り持ち来日鉄山に興えけるが其の後来らず、因って山中悉く尋ねければ谿谷を隔てて死せり。

按ずるに彼の猿薯蕷を堀り取らんとて岩を穿ちけるとき山上より岩石転げ落ち打殺されしと見えたれば鉄山和尚大いに悲しみ、猿を埋葬し其の上に石を建て猿塚といい、或は猿墓と号せり。今尚社地の南部にあり。

本屋は八つ棟造りにして上屋かゝれり。

一、祭神＝大已貴命

二、所在＝元八王子村元八王子二七三五番地。

三、社格＝村社

四、末社＝御嶽神社、牛頭神社、稲荷神社、山王神社、住吉神社。

五、祭典＝四月三日、九月廿九日

祭神は上筒男命、〇筒男命、〇〇〇〇の三神

勧請年間は詳かならず。其の後天〇元年九月北條氏之を再建す。禰後衰廃せしを以て天正十六年九月八王子城主北條陸奥守氏照亦之を造営すという。

此の社の近傍は今水田なれども住吉は大なる池地にして水鳥常に棲めり。其の中に鵜最も多くして該社の森を巣となしたるにより、里人鵜森社という口。伝はる。

◇諏訪神社

諏訪神社鎮守は人皇七十五代宗徳帝の御年大治元年七月二十六日にして元和九年幕府代官高室金兵ヱ氏其の息、難治の症に罹り薬石無効なるを当社に祈誓せしに病ひ忽然として平癒したれば高室氏其の霊験を感じて、元和九年社殿を再建せられ数種の神器を寄附せられしも貞享元年六月二十三日祝融の災に罹り拝殿接社神〇〇〇有に帰せしも幸い本社其の災を免れ高室氏再建の本社今尚存す。

一、宝物＝金幣一封、諏訪神社号軸、浅川神社扁額

二、祭神＝〇御名方命

三、所在＝元八王子村下一分方小字諏訪宿。

四、末社＝天神社、稲荷社、秋葉神社、五行神社、琴平神社、塩金神社、山王神社、日月神社、〇代神社

◇日吉神社　例祭日四月二十一日

当社は天正三乙〇年八王子城主北條陸奥守氏照公、当郷移城の砌り此の大神の功徳実に偉大にして神感亦頗る顕著なる神なれば、日本領土には国土経営主神として必ず此の大神を奉斉せらるゝを以て、本領内景勝の地を選びて八王子城東方の守護神として勧請し当地の氏神とす。天正五〇丑年夏疫病国々に満延し、城主大に領民の恩を憂い此の大厄を退択せしめんと当社に祈願を修し、秋に至り全く領内安穏に得したるにより常に崇敬深く倍臣をして不怠祈願あらせらる。

天正十八年六月二十三日八王子攻撃の時兵火に罹り社殿を始め古記録、古文書、神宝悉く烏有に帰せり。

徳川幕府歴代除地として諸役を免除せらる。

一、祭神＝大巳貴神（大国主命）

二、所在＝元八王子村横川字九号九五五

三、社格＝村社

◯日枝神社

創立年月日不詳

一、祭神＝大巳貴命

◯琴平神社　例祭日四月一日

一、沿革＝不明

二、例祭日＝九月一日なりしも関東大震災の時より四月一日に改められしなり。

三、所在＝元八王子村川村字屋敷添二〇六。

◯稲荷神社　例祭日初午当日

一、沿革＝不明

◯御嶽神社　例祭日九月二十九日

一、沿革＝不明

◯御霊神社　例祭日九月二十九日

御霊神社は建久年間梶原平三景時、元八王子村元八王子字御霊谷に居住の際先祖鎌倉権五郎景正の霊を勧請せしものなりという。

寺院の部

◯東京山浄土院相即寺　浄土宗

一、所在地＝南多摩郡元八王子村大字下一分方一一三二（小字花川）

二、由　緒＝天文十五年人皇、百六代後奈院御○

四月十五日開山天○社忍誉貞安上人相列鎌倉光明寺十世忍運社源誉上人の弟子にて当郡浄土宗殿宇の開起者なり。村民の勧請に依り一宇を創立す。浄土宗と称す。

元天台宗の寺院の旧跡なり。第二世讃誉牛秀上人八王子城主北條氏照の帰依深く当寺を以て祈願所とす。時に天正十八年六月二十三日氏照落城の際現場に至り戦死者千二百八十三人に引導す。内二百八十三人は当時檀信徒たるを以て過去帳に記載し、今に現存するものなり。

沿革＝天文十五年開山、忍誉貞安上人村民の寄附により建坪十六坪の堂建立、其の後百八十年に至り堂宇大破、正徳二年四月中興開山十一世迎誉了○上人檀信徒に寄附を請い現在の建坪六十四坪の堂宇を再建せり。

其の後亦、二百年堂宇大破大正十二年二月、二十六世○誉達　檀信徒の寄附を請ひ大修理をなし現今に至る。

所属本寺＝八王子市大横町大善寺（浄土宗福称）

歴代住職＝開山忍誉貞安上人、二世讃誉牛秀上人、三世正蓮社教誉上人、四世真○蓮社○誉上人五世源蓮社善誉上人、六世然蓮社法誉上人、十一世当寺中興迎誉了尚、二十三世祥誉東瑞、二十五

世静誉良康、二十六世現住貫誉達善
年中行事＝月並説教、毎月二十五日大正天皇御忌日、浄土宗、法然上人忌日。
参詣者五十人春秋彼岸会参詣者参百人、盆大施餓思会参詣者参百人濃仏会四月八日、涅槃会二月十五日、十夜十月一日。

◇所属仏堂

一、名称＝地蔵堂（六間四間二重家根造り）
二、由緒＝正徳二年再建、北條氏照八王子城落城の際戦死者二百八十三名の首を埋葬す。堂内に二百八十三体の高さ三尺の石地蔵尊あり。
三、沿革＝八王子城戦死者一千二百八十三名を祀るために建立せしものなり。堂大破せし故東京府知事の許可を得て寄附七十万篤志家に請う。史蹟保存のためなり。
四、仏像＝本尊阿弥陀如来（一躯）座像木製、御丈三尺、台座四重高さ五尺三寸、舟後光六尺金箔付、作者不詳両大師（二躯）座像木製御丈一尺五寸台座三重高尺二尺五寸作者不詳。
開山上人（一躯）座像木製御丈一尺五寸、台座一尺、高さ二尺五寸。火防地蔵尊（一躯）
立像木製厨子入厨子高さ三尺御丈八寸、台座二重、高さ一尺、聖徳太子丸木の作。
延命地蔵尊（一躯）座像木製、御丈二尺五寸、台座四重、高さ五尺五寸、丸後光、阿弥陀如来（一躯）座像木製御丈一尺二寸台座五重、高さ四尺二寸、日本三体、作者定朝、地蔵尊（一躯）座像青銅製、御丈三尺台座三重、高さ五尺、〇〇五十貫。
五、寺宝＝六字名号所〇〇〇〇〇建暦元年二月源空判作（一軸）

六、建物＝本堂間口八間奥行八間木造亜鉛葺
創建天文十五年四月十五日、正徳二年再建瓦葺なりしが大破のため大正十二年二月亜鉛葺となす。
七、庫裡＝間口五間半奥行四間半木造亜鉛葺
大正五年五月再建
八、蓮楼堂＝間口奥行二間木造萱葺、正徳徳二年八月建設
九、門＝間口二間半奥行二間木造亜鉛葺、正徳二年八月建設
十、地蔵尊＝間口奥行六間木造瓦葺二室、家根正徳二年八月再建、書籍経巻等（宝物に属せざるもの）浄土宗全巻二十四冊（浄土宗々曲刊行会編〇）浄土三部妙典四巻（浄土宗々典刊行会編纂）檀信徒数檀徒二百軒、徒三十軒。

◇長圓寺　浄土宗

一、所在地＝南多摩郡元八王子村大楽寺二八一
二、由緒＝天正年間北條氏照を開基として〇〇牛秀和尚の開山
三、所属本寺＝大善寺（八王子市）
四、歴代住職＝開山以来住職を欠員したことも現在二十四世なり。現住職菊地英純
五、仏造＝本尊阿弥陀如来（一躯）立像木彫刻作者不明其の他記載すべき仏像なし。
六、建物＝本堂間口五間奥行五間半木造建設年代不明
七、庫裡＝間口四間半奥行三間木造建設年不明。檀徒数十一軒、信徒数なし

◪宗関寺　曹洞宗

一、所在地＝南多摩郡元八王子村大字元八王子二五六一番地

二、由緒＝中宿の西、禅宗曹洞派恩方村心源法の末寺なり。

三、沿革＝朝遊山と号し、開山は随翁舜悦禅師、文禄元年北條氏照のため建立す。昔は今のところより三町ばかり西にあり。昔此の地神護という古刹あり。之は華厳菩薩の開祠にして朱雀院の勅願所たりしと。星霜を経て衰廃せり。北條氏照此の地在城の頃再興して仏国並照禅師を開山として馬頭山と号す。其の頃氏照の申請せしにや正親町院より倫旨を賜はりし由云い伝う。かゝる繁栄も僅かにして天正十八年八王子城没落の後再廃したるにより舜悦禅師別に一寺を建て朝遊山宗関寺と号す。抑々朝遊山と号するは、元此の地に朝遊軒として氏照の禅室ありしにより寺号宗関は氏照の法灯によれり。本尊釈迦木の聖像は台座共に長さは一尺四寸安阿弥の作なり。本堂九間半に七間、宗関寺の三大字を扁額は同筆にて朝遊山のみ字を録書す。

四、観音堂＝境内惣門道より左の方山上にあり、観音木の立像にして長さ七寸恵、心僧の作。氏照の妻室の守本尊の由伝えらる。観音堂の三大字を扁す。黄檗悦山の筆行書なりといふ。

五、寺宝＝法衣、金蘭なり。落城の時中山勘解由手負いて来りしに住職僧有りつる法衣を打ちかけしといふ。血少しく染みてあり。裏に天正元発酉八月二十八日舜悦首座とせり。

六、正観音一躯＝恵心僧都の作。氏照妻女の守本尊なり。

七、古記録＝寡永中悦随翁卜山の書きしものなり。氏照時代の事を詳に記せり。

◪西蓮寺　真言宗

一、所在地＝南多摩郡元八王子村大楽寺

二、由緒＝新義真言宗大幡の宝生寺華川山不動院と号す。開山開基不明。中興開山祐眞、寛正二年二月朔日寂すといえば之より古く造営せられたるや明なり。弘治三年北條氏より賜いし文書一通蔵す。其の文は左に……

『八王子城落ノ時主僧祐寛カシコニ変死ス』と寺中の棟別之事指置畢不可有相違者也仍如件。弘法三年十一月二十七日八日市場西蓮寺。

三、仏像＝本尊は不動の座像一尺七寸、弘法大師の作なり。明治の代に至りて火災に罹り焼失し今日は金谷寺跡に移れり。

◪法泉寺　臨済宗

由緒＝臨済宗山田広円寺末神戸山と号す。尊釈迦は高野山願行上人の作なりと。開山の事は不詳。開基は開山土佐にして天文十五年創立、土佐の子孫は今二分方の開山を氏とす。天文の頃より玆に住して旧家なれど古記を失うて事実不詳なり。村の水帳には法泉寺と記せり。近き頃寺号に改めしなるべし。

◪金谷寺

今は廃寺となりて其の跡に西蓮寺建立せられたり。叶谷にあり大畑の宝生寺末叶谷山医王院と号す。境内の薬師堂は天正以前のものなりという。八王城攻めのとき上杉勢の兵糧を炊きしとて、今も尚堂中の鴨居のほとり勾梁まで燻りてあり。

元八王子村名所旧蹟伝記

◪元八王子村の地名

城山に建てられた江川英武翁の撰に係う八王神社の碑文に、文徳天皇の朝平安の借妙行　此の地に来り静座経を誦して止まず。一夜神人あり、自ら午頭天皇と称し八王子を率いて来る。天王は即ち素戔嗚尊、八子は其の五男三女なり。妙行、地を此処に宿して祠を建て之を祀り八王子権現と称す。時に延喜十六年三月也。（醍醐天皇一五七六年）とあり。

即ち素戔嗚の八人の御子を祀った「八王子」より起るといふ。妙行は後に華厳菩薩といふ尊号を賜った大徳である。越えて元亀、天正の頃（正親町天皇）の北條氏が滝山から居を此処に移し、八王子権現を以って其の鎮守となし城名を八王子城と唱え、城下をも広く八王子と呼んだのである。

◪元八王子の三宿

滝山城の元八王子に移るや其の城下なる横山、八日市、八幡の三宿を初め、極楽寺、大善寺の二大寺も従って移転し、城下町は更に繁営し市日も行はれた。此の土地に移転後三十年にして其の隆昌の極に達した。

氏照の作中当時の八王子八景中「桑都晴嵐」の項に「郭外民家七、八千東西南北桑田茂」と謳はれ又『蚕から桑の都の青あらし市のかりやにさわぐもろ人』に見るもうかがわれる。偶々天正十八年六月二十三日（正親町天皇）豊臣秀吉のために陥落し城下町の町民は四方に離散せんとし

た。此の時長田作左ヱ門というものあり。前田利家の命を受けて直ちに城下町を今の八王子（昔の横川村）に移した。此処で城下町八王子に元の字を冠し今の八王子の繁華町、横山、八日市、八幡の町名を今も残してゐる。

◪横川楳子女史邸

お天狗屋敷、水無瀬橋から西三百米の右に俗に『お天狗屋敷』という宏壮な横川重之氏の邸がある。八王子城門の一、此の表門は当時のまゝで誰もが気付く。八王子城搦手の門であったが落城後千人隊の組頭である河野氏の門となり維新後千人隊の解散によって横川氏の門になって今に存す。

楳子女子、名門名主の家に生れた女史は夙に異才を抱き特志を司し、女子としては時流に例なき教育を受け、後お茶の水にありたる東京女子師範学校に学び、引つゞき同校の教育に任じ後職を辞して帰村す。此の間八王子地方の女子教育は未だ揺藍の内にありて小学校教育すら修める者の僅小にて、ましてや夫れ以上の教育を修める機関もなく又望むものもなく、地方文化の発展上憂慮に堪えぬ状態を見て、女史は如何にかして若き女子に裁縫其の他女子の心得を授けんとして、八王子町横川町に住宅を借りて教授所を設け篤志の少女等に教育を始めたり。明治二十四年に本立寺前に一校舎を新築し校則を改め、事業を拡張して認可を経、幼稚園小学校も併置する学校として公認せられたり。此の間常に私費を投じが大成を期した。後日清戦役起り一般に不景気となり打撃を受けたるも漸く切り抜け得たのであるが再び日露の戦に遇い、支持全く不可能の状態になった。此の艱難を見て土地の有志後援会をつくり、校費を遠出して存続す。此の時府立高女増設の議起り八王子地方の有志横川氏の事業を領り此の地に設置すべきことを主張し斡旋に努めたる結果、遂に明治四十

一年府立第四高女校を設けるに至る。女子の悦び一方ならず、校舎、校具を挙げて東京府に寄附し生徒悉く新校に入学せしめ自ら身を退く。

之より八王子婦人会を創立し推れて会長となり、古稀の高令に達し閑地に退けり。

而も尚元気にして機会ある毎に後輩を出むことことを知らず。真に偉婦人にして地方女子教育の大恩人と請うべし。

大正十五年一月二日、安らけく此の邸に永眠す。右側の邸の側に松の木を植え空地あり。此処に女学校々舎を設けんとした所である。松の色と共に横川女史の功績は末代まで絶えぬことであろう。

◇西蓮寺

華川山不動院と号す。明治の初に至り焼失して現在の地に移る。此処もと金谷寺跡なり。新義真言大幡山宝生寺の末なり。古は滝山辺にあり。八王子城の頃当地に移る。北條氏照祈願所にて殊に帰衣の事なれば天上十八年落城の節、祐覚法師は城中にて焼死すという。

境内に薬師堂あり。天正以前の建築と云われ古風な建物なり。傍に大松一株あり。

山中勘解由の参籠の時植えたるものとの碑文あり。二王門梵鐘あり。釣鐘は桧原村橋本治右ヱ門が大願主となって鋳造したものであり、作者は横川村加藤六左ヱ門である。此の大楽寺下一分方あたり八王子城の頃八日市場にて今の諏訪宿辺りも古より市町もありし故、其の後も陣屋を置かれ繁華の地であった。

◇相即寺

下一分方に属す。最初は東京山と号す。後改めて田中山と号す。御未即寺領十石大善寺末なり。

起立天文十五年八月十五日（御奈良帝三九一年前）

名木桧松あり。周囲二米桧の地上三米許りの幹より一本の松蟠居して生じ此の名あり。

延命閣九間四方の修堂あり。八王子城陥落の時当時二世文貞讃誉上人戦死者千二百八十三人を引導して遺骨を埋葬して其の上に堂を建立し、火防子育延命地蔵を本尊とし外に百六十体の石地蔵を安置して戦死者の冥福を祈る。近年復興され修理中なり。

◇華川の蛍

相即寺の西二町の所に榎の根本から湧き出る池がある。又住吉社地の後よりも清水湧出す。この辺沼地なりと云い伝えらる。

もと此の沼の北に鵜森神社があった。多くの水鳥棲み、　多くこの社の森を巣として居たため里人『鵜の森』と云う。

八王城落城の時焼失し何も存せず。此の辺り清水池から毎年大きな蛍出で暗夜に灯の如く賑う。華川の蛍は有名である。

◇叶谷（かのうや）

大楽寺村の東部に叶谷部落あり。もと金谷寺あり。叶野山医王院と号す。

新義真言大幡山、宝生寺末なり。中古金谷山、金谷寺とかき文字を替えて今の文字とせり。山号、字号より起れる村名なり。

◇千本木

大楽寺の内に千本木の小字あり。此処の畠中に種字弥防延丈四年八月日と三尊仏華〇付、応永二

年八月（後小松帝五四〇年前）逆修妙〇と記したる二枚の板碑あり。此の地昔寺跡と云はる。

◇大楽寺

本村大字大楽寺はもと由井領にて村内に王蔵院と云う小刹あり。此の号を『大楽寺』と云う。夫れは往古は大寺なりしとも伝う。現在役場附近は大楽寺跡と云い伝えらる。

之より大楽寺の地名出でたるらし。

◇山口重兵ヱ氏碑

四ッ谷バス停留場郵便局側に碑石あり。碑文は『衆議員議長勲三等　谷義三〇〇君、姓ハ山口名ハ重兵ヱ、嘉永元年八月十四日武蔵国下一分ニ生ル。次性俊敏ニシテ大義ニ通ズ。明治初年板垣伯ノ自由民権ヲ首唱スルヤ君起チテ之ニ応ジ、石坂昌孝氏ト提唱シテ国事ニ勤労スル年アリ。或ハ又自　武館ヲ邸内ニ設ケ以テ青年ノ志気を鼓吹ス。任狭ノ風為ニ大イニ起ル。其ノ後地方自治制ノ施行セラル、ヤ挙ゲテ村会議員、都会議員、県会議員トナリ私ヲ志シテ公ニ奉ズルコト実ニ、三十余年効積勘ナカラズ。大正五年一月二十九日病没ス。享年六十、又〇郷党痛惜カズ。茲ニ相課リテ碑ヲ建テ以テ其ノ効徳ヲアラハスト云爾。』とあり。

三多摩政界の先覚者、将又人格者として尊敬せられ、令息山口氏は下一方に住す。

◇諏訪神社

下一分方諏訪宿にあり。慶長中御代官高室氏茲の地に住宅し勧請すと云う。神主小松氏、祭典は八月二十六、二十七の両日にて高囲をめぐる杉の神厳たゞよう。林中に挙げらる獅子舞あり。四ッ谷部落より正装して舞を奉納す。祭例のとき新婚者は近郷より参拝する風習あり。又饅頭を作るを

恒例とす。之を食すと一年間悪疫を除くと。

◇神　戸

大楽寺西の村境に神戸山法泉寺あり。山田広圓寺の末なり。開基は関山氏土佐と云う。此の寺の西南に山王社あり。関山氏の勧請せしもの、年月知れず。神戸は此の社地のふもとなり。古社領ないし故神戸と称せしという。

◇松姫庵の跡

二分方に熊野神社の小祠がある。此の御手洗の清水は一名疣取水と云って、此の水をつけると奇妙に疣がとれると云うので遠近より竹筒をもっていただきに来るものが多い。

此の小祠の上方約二アール許りの平坦な場所がある。里人は八王子市信松院の開基松姫が〇〇〇んだ蹟と伝へてゐる。己が生家没落後不遇な運命の波に弄されて流浪の生活を送った武田松姫が一時こゝに雨露を凌ぐに足る草庵を結んだらしい。落城後八王子に移ったと云う。

◇刀剣工照重

上横川の字下原といふ地に住して、北條氏の刀工なり。先祖は相州正宗の伝を鍛えて国重と号す。山本源二郎照重この地に移る。武州下原住と銘ず。

入国後除地を賜い、刀剣御用を命ぜられ屋敷一町一反三畝十四歩の地を賜う。又宗国の家は元八王子に住し康国の家は下恩方村に住す。皆山本と称して一類なり。

山本源二郎照重～二代照重（天文永禄年間）～三代照重（永禄天正）～四代照重（天正、文禄）、北條氏滅亡後大祖神君に御剣を奉ず。

畑地屋敷とも九段十六歩余賜う。

其の後、水府黄門公に呼ばれ御興脇の槍を仰せつけられたり。其の後徳川の中期から鉄砲鍛治となり、明治初年まで其の業を続けてゐた。今同家に当時の遺物として長さ一尺二寸五分幅一尺の金敷がある。

◇釣鐘師加藤一家

刀匠照重の家敷の向う山の手に加藤という鋳物師の屋敷がある。徳川時代に六郎右ヱ門、長右ヱ門、事兵衛といふ人々住み、三人共朝廷の御用鋳物師と伝えらる。

芝増上の鐘が中々出来上らざりしとき、当時の奉行加藤県は甚だ無○した末ふと武州横川村滝原に鋳物師兄弟ありて、地金を別に溶解し型に流すと融合し、如何なる大物も鋳造するとの噂を聞き、神のお告と喜び早速江戸に召し鋳造を命じたり。

之にて三人協力遂に釣鐘を納めたり。奉行○○此の上なく命の恩人なりとて己が性、加藤を與えたり。因りて此の地加藤家を名乗るに至ったと云う。

加藤家の鋳造による鐘と伝えられるもの、

一、寛永三年＝八王子市大善寺
一、仝十九年＝横山村山田広圓寺
一、慶安四年＝八王子極楽寺
一、享保十六年＝元八王子相即寺
一、明和六年＝　仝　　西蓮寺

其の他十七、合計二十二、殊に高幡金剛寺横山眞覚寺に納めたるもの芸術の香り高きものなりと伝われる。

◇やと梅

八幡宿に俗称『谷戸梅』と云う奇人が居た。彼は天性器用な上に美音を持ってゐた。又絵も上手で堂に入ったものである。

古来城山の南、棚ヶ谷戸に大蟇が棲んで居たという伝説があるのを知り、之から採材して大蟇退治に脚色して絵を描き、覗きからくりに仕立て所々方々を歩き『サアサア之こそ武蔵国城山麓の大蟇退治の寛治』と天性の美音で節面白く絵話をして武州城山の大蟇が有名になったという。

◇七面大明神（元八王子村元八王子四番地）

境内地積は一二三坪である。本堂は恩方村寺方大畑宝生寺の所属であった。弘化年間（一八四四年）之を買受けて移転再建した。堂は本立寺法蓮寺、善能寺の三寺院の檀家で構成してゐる。

間口二間、奥行三、五間で床面は上段下段に分れてゐる。盆天上の花木草木は十五桝に、谷戸梅老奇人が絵いたと伝へらる。中央祭段に厨子あり両側に一本づつの燻れた立仏像がある。本尊七面天女は木彫極彩色の面長の柔和な美人で高さ八寸八分の座像である。像の底部に『元文二年三月（一七三六年）大吉日』とあり『東都日本橋住の大仏師長谷川善兵ヱ』と記されてある。また厨子の天上板に『御記録七面大明神、元禄五年（一六八年）勧請御堂再建、元文二年三月（一七三六年）御彩色、安政六年九月一日再御再色』と記録され八王子八木宿住、仏師亀吉』とある。西軒には口

経一尺八寸の半鐘が吊され鐘には『宝歴四年建立、弘化〇年の再建で七面大明神御宝前とある。

大明神の由来。七面は身延にあり日蓮上人身延山にて法華経を読誦せし折一人の美人忽然と来り『我はこの山の神なり今よりのち大守護神となり我が本体を見給へ』として大蛇の姿を現してやがてお姿を匿し給へり。（以上は江戸谷中の感応寺に記録されていると伝へらる。）昔時は祭礼も盛んであり、津久井郡大島方面より善男善女相集りて堂内足の踏み場もなかったが栄枯盛衰は時代が変へて行く。

今では管理者が経徒となり月の八日に数人の信女集りて、ほのかに灯明が続けられている。信仰と崇拝の念は人をして善に導きそれは民族の宝である。例祭は年一度九月二十八、九の両日であったが今日では二十八日である。（附記・安田）

◇不動尊堂（元八王子村元八王子四五六番地堂地（除地）一反七畝拾歩也。）

通称月夜峯の手前の小丘に『不動尊堂』がある。堂は二間四方造りの小祠で元は西光院の持にして此処に里人移し建立せり。（現在のものは中央高速道路開通に関し昭和四十三年十月の再建である。）み堂内に青銅鋳造りの御本尊像ありしも「六部」又は「托鉢僧」に持ちさられて了ったとの言ひ伝へがある。

現今の御本尊像は高さ四尺程の石造りで柔和な女性尊のようであるが年代不詳である。

属に、鎌倉～日光街道と言ひ伝ひる道に面して境内も広く苔蒸した桜の古木が堂に花を添えていた。社寺法に依り昭和二十四年十二月二十二日、西蓮寺の管理となり例祭は四月二十九日である。

堂の北に城山川あり『不動滝』が存したと伝へらるゝも不詳で、橋の袂に僅かに湧き出でし腹流

水が偲ばれる。（附記・安田生）

◇八王子城第一門

八幡宿の人家の切れる処の右に秋葉神社という小詞がある。此の先に右に墓地、左に石地蔵が安置してある。此処に〇構えの土手がある。

八王子城第一関門のあった横口で上の平坦な所を横山原と云ってゐる。城山までは二十町もある。古戦記に＝一万五千余の軍片を亥の刻（夜の十時）より段々に進め近寄って丑の刻（夜二時）横山に至り黎明に横山口の城戸を破るといえども城までは遥かに遠き故之知らず守兵少くして易々と之を破る、云々。

とある横山口の古戦である。

◇月夜峯、旗塚

左にある丘陵は月夜峯である。横川端の龍泉寺から此の峯伝いに出羽山、大名山を経て大鼓曲輪に出る路があったそうである。天正十八年六月八王子城攻めの寄手は此の道から山上に押し進んで屯したもので峯通りは眺望よく、北條氏照居の時、此の地に月を賞せしより地の名を月夜峯と号す。又北條氏の盛んな時は別荘ありしと云う。

旗塚は天正十八年寄手の軍勢此の地に屯をかまえ城上の方に向い丘陵の上に大なる塚あり。七ッ塚とも云はれてゐる。旗塚と云う。

八王子落城後氏照の室『お比佐』の方が待女数名とわびしい余生を送ったと云う。

◇氏照の側室

氏照の側室については余りにも不明である。郷土誌の中にもその名前が判明できず、ある史家に伺った処、大石遠江守定久の娘であり『比佐』と分った（然しこれとても、さだかでないが大石家の系図に記してある由。）戒名＝天桂院殿輝恋祐晃大姉元禄元年八月二十二日八十七才で死亡した。この郷土誌及び他の史説にも氏照の女性に関しての艶事の伝記はない。淋しい武将であり清らかな城主であったらうか。（附記・安田生）

◇傾城塚

横山原を四、五町南に行くと右に消防器具置場があり桜の老樹が一本ある。その下に塔が二本並んで塚がある。里人は之を傾城塚と呼ぶ。城下町旺んな頃遊廓軒を連ねてありしと云う。落城の時寄手は逃げおくれた遊女を切り捨てたので不憫に思い此の塚をつくりしものと云れてゐる。

此の地の東は今八王子市にある大善寺、極楽寺のあった跡で此の両寺はもと滝山城下にあったのを城移転と共に此処に移したのであるが長田作右ェ門が現在の地八王子に建設を企てたとき移転したものである。

又桜の木は『おさる』と云われてゐる。今はその○位に当る。之は『恩方辺名』の桜と同じく源義経が千本の桜を植えた一本である。と伝えらる。

◇道場根

『おさるの木』の右手地盤低き地を道場根と云う。

昔剣聖神宮寺伊豆守が此処に道場を開いてゐたから此の名があると云うことである。此谷戸に三十六番札所の西光院といふ小寺がある。此の谷の奥深い所を梶原谷戸と云う。梶原景時の屋敷ありと云う。此処より今の八幡桜の地とかけて領地と云われてゐる。

◇八幡神社

元八王子村鎮守で社地、村の中央にある。

御朱印社領拾石、別当西明寺なり。北方に社領中に寺があった。

神体＝甲冑馬上の木像。例祭＝四月十六日（注現今は四月第三日曜日）

大門路一町余、入口に鳥居あり。俗に梶原八幡宮と称す。梶原平三景時の勧請によるものである。梶原杉＝大杉二株あって一本は本社の側に、次は大門路の中にある。これは梶原の勧請した時のものである。

宝物＝弘法大師墨跡の一軸。八幡宮と縦書せる書、之は甲斐律師と云う者の奉納せるもの。

◇梶原杉

梶原杉は昭和三年三月都の天然記念物指定となる。七百五十年余の歴史を経た銘木も老衰し一部枯れをみたので惜別することになった。

昭和四十七年である。此の間二度の失火を起して最上部より火煙出で勇気ある消防士により上部より放水して消火したのは昭和三十八年八月二十二日である。

昭和四十七年四月一日斧入式、追て同年四月二十九日氏子民大勢に見守らる中切倒れた。銘木死

して尚姿残すか、下部二株を丸切りとして、要請の八王子資料館及び高尾の自然科学博物館に約一尺厚さの輪切りにして寄贈した。特種な技術必要なため茨城県より其の人を呼び二日を要して成す。（瀬沼庄太氏の厚意であった。）此の銘木梶原杉の代価によって八幡神社社殿大修裡も出来たが完成祝ひも待たず宮司梶原正義氏は梶原杉の後を追かのように昭和四十八年二月二十三日死去行年七十三才であった。　附記（安田生）

◇慈根寺（神宮寺）跡

八王子村の古名は、慈根寺村と唱えた由なり。之がこの村の起りと云う。

当村に西明寺と云う古刹あり。

山号を慈根山と号す。八幡宮の別当なり。中古或は神宮寺とも書きたり。宗関寺の鐘の銘に『心越禅寺』と記されてゐる。今元八王子というを『じごじ寺』と号されてゐる。八王子城が築かれた後も慈根寺村と云はれてゐた。

後に八幡宮が鎌倉より梶原景時が勧請した。之から慈根寺と神宮寺が混同され遂いに村名にも混同されたと云はれる。

◇妙観寺

八幡神社前に荒れ果てた寺がある。山号を霊〇山という。新義眞言宗御霊明神の別当であったから相当の勢力のあったものと思う。

此の前から浅川駅に出る道路がある。道側に地蔵がある。石積地蔵と云う。台石に天明五年十一月とある。天明の大飢饉は此の辺一帯にも悲惨な物語りを残してゐるが其の供養のため造られたものである。

◇御霊明神

鎌倉権五郎景政を祀る。建久年間梶原景時が八幡宮を勧請したとき、共に此の社を勧請したと伝えられるが景政は景時の遠祖であり、且つ景時の母は横山氏の出であるから縁故のあるわけである。景政は『くつわ虫』を嫌い、此の地には一匹のくつわ虫もすまず他から持ち来るも直ぐ死んでしまうと伝られてゐる。

◇宗関寺

朝遊山と号す。同家下恩方心源院末なり。御朱印寺領十石。

本尊＝釈迦如来（下座像）安阿弥作。

起立＝永禄七年建立。

開山＝随翁舜悦和尚。

昔は現在地より西北寄りの谷合にありしを明治初年に移す。何時しかすたれて城主北條氏照が嘆いて、仏国普照禅師（舜悦）が再興、牛頭山と号したが十二年には正親町天皇の勅願所たる綸旨を賜った。氏照は大いに之を保護した。八王子城滅亡の時兵火にかゝる前、禅師別に山寺を建てゝ氏照の禅室を朝遊軒と呼んだのと、又氏照の法号を宗関居士との両方をとりて今の朝遊山宗関寺と名づけた。

宗関寺と朝遊山の扁額と梵鐘は、明の人、心越禅師の筆、之は元禄二年氏照公百回忌の時、水戸家に仕えた中山勘解由の後裔中山備前守信治の寄進によるものである。

◇横地堤

宗関寺の東境に南北に連なる堤がある。之は八王子城築城のとき老臣横地監物吉信が軍用の防禦用陣として築堤したもので、今も横地堤と名が残ってゐる。之に城山川から流れでる水を溜めて一朝有事の際此の堤を切って寄手に水、雑水の戦術であったと云はれる。

◇氏照主従の墓

宗関寺から西に進んだ所の右側に松樹の茂る小丘がある。其の下に氏照主従の墓がある。氏照のは七尺余の屋根付位牌形のもので正面に『青霄院殿透丘宗関大居士』天正十八年七月十一日、裏面に元禄二年七月二日、陸奥守氏照公現住信庵児海音再興と刻してあり、左右には元禄時代の特徴なる蓮華の花が浮刻にしてある。此の墓は再建で遺臣の末である伊勢の人鉄山無人が時の住職と協力して百回忌の時建てたものである。

◇八王子神社

古城山の頂に鎮座す。もとの八王子権現である。別当は西明寺、例祭は四月十五日（現今は四月第三日曜日）村の鎮守である。

祭神牛頭天王弁八王子也。牛頭天王は素戔嗚命であり、八王子即ち、八将神也。鉄心という人建立す。社伝云、延喜帝十三年の秋、華厳菩薩妙行和尚という大徳ある僧、此の深沢の麓に住んで此の所の瀑布に入って勤行し給う所に、忽然として牛頭天王現れ給い『此の処に我を祀うは永く汝を守護せん』との神勅あり。同十六年暮、春十五日此の地に始めて八王子権現弁牛頭天王を勤請すと云う。

八将神の母后は沙　龍王の女○梨女なり。之即ち歳徳神なり。

◇八王子

第一＝摠光天王　第五＝良待天皇
第二＝魔王天王　第六＝待神天皇
第三＝倶摩羅天王　第七＝○神天皇
第四＝得達天王　第八＝蛇毒鬼天皇

北條陸奥守氏照、同国滝山の居城を忌け、元亀天正の初め頃此の地に移り築城して山上に住古から鎮座の神八王子権現を鎮守とする。城の号も八王子城と称した。

◇八王子古城跡

築城の年歴不詳。元亀年中とも云う、又天正三年とも云う。城地は広大である。広大である故に天正十八年に至るも修営は全く終らずと云う。殊に山嶺には居館をかまうる平地なし。糧米の倉庫は山上ある。表口は南東、北は裏口である。水利は御殿跡の西横地堤で堤止めて○渠とする。裏口の方に霧降滝がある。又南の山地に池あり之を芦尾の池と云う。山上八王子神社の西に大きな井戸あり。

追手口＝大手口とも云う。又此の辺で大城戸とも云う。今は跡がない。　搦手口＝城の北で滝の沢口と云う。下恩方の方面なり。滝の沢と云う名を忌みて霧降谷と改めた。　広間跡＝城山下の登口の圧谷の麓に千畳敷の跡がある。大きな平地をなし、台石らしきものか、今もある。

◇八王子城攻め

天正十八年六月二十三日落城、城中搦手口、横地監物。中の丸、中山勘解由ー上杉軍。一庵郭、狩野一庵。大手口　金子郭、金子三郎ー前田利家。山下郭、近藤出羽守、安田上總介。

◇北條氏照

北條氏照は戦国時代○頭に於ける風雲児北條早雲の曽孫に当り氏康の次男である。彼が一代の英俊児として流石の大国秀吉をも煙たからしめたのもかうした優秀な系統に出てゐるからである。氏照について宗関寺所蔵の文書中（牛頭弘宗伝）中に透岳宗関居士は北條氏照なり。資性勇敢にして兼ねて仏教を信ず。始めて大石氏（定久）の継嗣となり、由井源三と称す。弘治初年奥州大守となる。武蔵の高築城に據り、永緑五年移って八王子城に居り、之より先心源に到って仏国の鑑院を尋ねて道要を譜問す。九年牛頭宗関寺の廃を興して仏国を迎へて○法せしめる。八王子城内に朝遊軒を○○○○処とし、諸名僧を招いて一時禅談に○○○。天正十八年秀吉を以て小田原城を囲む。氏照住いて之を授く。免る○○○自殺せしめらる。七月十二日○新四十九とあり。氏照は氏康の子にして六人の男、六人の女の兄弟あり。兄氏政は小田原、三男氏房は韮山を守り後河内狭山の城主となる。今の北條子○は此の裔である。四男安房○氏邦は○○を○めり。

五男氏祐は○○○の名手。六男氏克は砲術に秀で　男は謙信の○○○○と号す。二男氏照は武州十郡の大守である。大石遠江守定久の養子となり、由井源三氏照と称したが程なく北條を名乗った。氏照が滝山城を出で八王子城によったのは甲斐の武田氏に備へるためであった。氏照は識見は高遇であった。滝は落つると云われてゐるか、北條五代記中には武田に備えると明記してある。趣味の

人氏照。

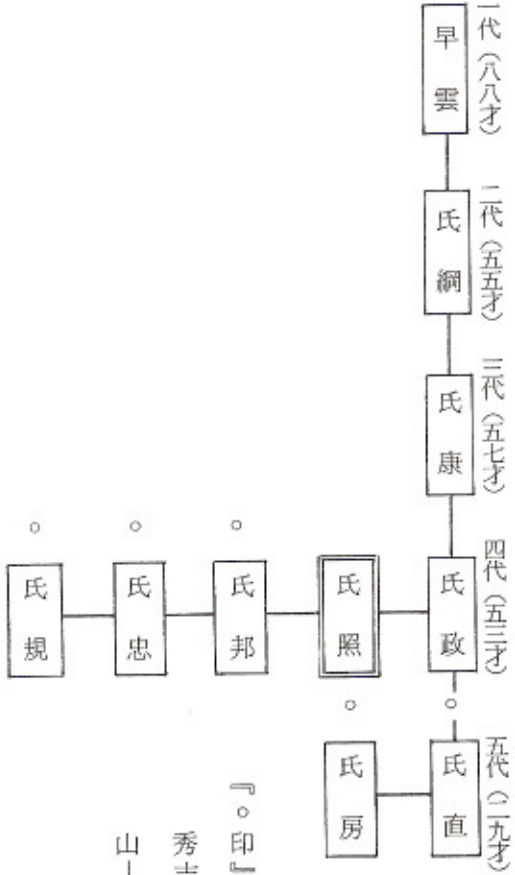
氏康、氏政は謡曲を好んだが氏照は横笛の名手として聞え、在城中は余暇を利し自ら横笛を吹き臣下に舞はしめて興じたという。秘蔵の『大黒』と称した名笛は金の高刻を据えて其の名あり。之を三十年も愛蔵して居たが落城の時預ける家臣笛の彦兵清範が討死して天下の名笛も灰燼と化した。

主人のゐぬ八王子城で部下の此の花々しい戦跡から見て如何に部下を愛してゐたか解るのである。

終　り

氏照の系図

一、北条五代は箱根湯本の『早雲寺』に墓がある。
一、氏政、氏照の墓は小田原デパートの裏にある。



一、八王子城は六月二十三日落城
一、小田原城は七月六日落城
一、氏政・氏照は七月十一日医師、田村安清の家敷で切腹する。
二人は秀吉が三ヶ国を与えるとまで言ったので当然助命されると思って居たがへそを噛んだ。
介錯は弟の氏規が願い出た。
氏規は介錯が終ると自分も切腹しようとしたが思ひとどませられた。北条一族の史は終末になったが氏規の子孫だけが江戸時代から明治と北条氏の名跡を保った。（附記・安田）

（以上の大略は史家の江崎惇氏による。）

昭和６３年４月　１　日＝印刷
昭和６３年４月２５日＝発行

元八王子村郷土誌

元編者　元八王子村小学校
再編者　安　田　富　一
印刷・製本
株式会社　ヒラツカ印刷社
電話（0426）23−0381〜4

非　売　品